

【書評】

米田昇平『経済学の起源——フランス 欲望の経済思想』

京都大学学術出版会，2016年，320+24頁

「経済学の父」といえばアダム・スミスを指すように，現代経済学の起源を探るには，主にスミスを育んだ歴史的・思想的背景に注目するのが経済学史研究の一般的な態度であろう。フランスには，スミスに先行するケネーがおり，そのケネーを中心にフランス独自の経済学の展開が注目されることはある。しかしそのケネーの陰に，これまであまり注目されてこなかった豊かな思想的脈があるのではないか，というのが本書の問題意識である。

著者はすでに，前著『欲求と秩序—18世紀フランス経済学の展開』（2005）において，17世紀末に「レッセ・フェール」の秩序原理を発見したボワギルベールに注目し，それを出発点とした18世紀のフランス経済学の多元性を明らかにした。本書でも，ボワギルベールが重要な役割を演じるが，「欲望」を中心とした消費者行動の経済学が，いかにして生成したかという点にテーマが絞られる。

本書は，以下のような構成をとっている。

- 序章 経済学の起源—フランスのコンテクストとの関連で
- 第1章 経済学の起源とアウグスティヌス主義—ニコルからボワギルベールへ
- 第2章 マンデヴィルの逆説—英仏の思想的展開との関連で
- 第3章 啓蒙の経済学—アベ・ド・サン=ピエール，ムロン，モンテスキューの商業社会論
- 第4章 奢侈論争とフランス経済学
- 終章 フランス経済学—欲望の経済思想

著者はまず，経済学の起源をアウグスティヌス主義の影響を受けた17世紀フランスの新思潮に求める。アウグスティヌス主義とは，原罪説に基づき，人間は神の恩寵にすぎない堕した無力な存在となるという考え方であるが，そこからあらゆる理想主義が否定され，人間の行動原理が「自己愛」や「利己心」のみに基づくということが受け入れられることとなった。このように伝統的なキリスト教の一つの悲観的な人間観が，ありのままの人間の認識と，それに基づく近代的な社会の分析に道を開くことになったという点は，印象的である。

アウグスティヌス主義からボワギルベールへの橋渡しとして注目すべきなのは，第一章に登場する，ピエール・ニコル（1625-1695）の思想である。「排他的な自己愛が結果として秩序形成に寄与する」というパラドックスに挑んだニコルたちが，快楽を求めて苦痛に耐えるという人間の原型を示し，200年後のジェヴォンズの考え方につながっているという指摘は興味深い。しかしながら「自己利益への顧慮が自己愛に歯止めをかける」というニコルの主張は，その「自己愛」が「開明的」である必要があることを前提としており恐怖を原理とする政治的秩序を必要とする点で，限界があった。それとは対照的にボワギルベールは，利益を求める自己愛に道徳的歯止めを想定せず，自己愛を抑止するのは政治権力ではなく「市場の強制力」であると考えたのである。

本書でボワギルベールと並び、大きな役割を果たすのが、第2章で取り上げられる、マンデヴィルである。彼の思想的源泉はアウグスティヌス主義に影響を受けたフランスの17世紀の思潮にあり、有名な「私悪は公益」という主張も、そのコンテキストで理解されなければならないと著者は主張する。マンデヴィルは、世間で徳とみなされているものはいない、利己的な本当の動機が隠蔽された偽りの徳に過ぎないと考え、その偽りの徳が一定の秩序維持機能を担うことを示した。アウグスティヌス主義がマンデヴィルを経てスミスに至ることを主張する研究者たちはいたが、マンデヴィルと思想的源泉を共有するボワギルベールについては、注目されることはなかったと本書は指摘する。

ボワギルベールこそは、「自己愛」の抑制装置としての市場機構を発見し、その市場機構を最初に分析した最初の経済学者であった。スミスの経済学もたしかに利己心に基づいているが、それはボワギルベールのように消費の欲求ではなく、主に節約や蓄積の観点、生産の部面から探求されていることを本書は指摘する。さらに『道徳感情論』において「あらゆる情念を…まったく悪徳なものとして描いていること」を『蜂の寓話』の欠点として指摘したスミスが、アウグスティヌス主義とは無縁であったという本書の指摘は興味深い。マンデヴィルの道徳的秩序は、自己愛を偽装した結果であり、スミスの秩序原理を構成する人間の道徳感情が人間本性に由来するのとは決定的な違いがあるのである。

ボワギルベールが道徳の問題を埒外において、経済的な観点からのみ消費主導論を展開したのに対して、マンデヴィルは人間本性の心理学的分析を消費行動に適用した。彼はヴェブレンに先んじて200年、消費というものを、社会的地位の表示・誇示手段としてとらえ、消費の社会性に注目していたので

ある。マンデヴィルが、儉約のパラドックスを念頭に置いて、「合成の誤謬」に論及していることも、のちにスミスが節約による資本蓄積の重要性を唱えたのとは対照的で非常に興味深い。ただしマンデヴィルは労働者階級については伝統的な観念に基づき、低賃金論に固執し、一般的な消費水準の向上を目指すことはなく、消費論を貫徹することはできなかったという。

このようなマンデヴィルの議論は、18世紀のあらゆる経済論争に影響を与え、ムロン、モンテスキュー、ヴォルテールの著書にその影響を認めることができる。フランスでは、ボワギルベールの業績を踏まえつつ、マンデヴィルの議論に向き合い、奢侈容認論への系譜が紡がれることになった。この奢侈論争については本書のフィナーレである第4章「奢侈論争とフランス経済学」でその全貌が明らかにされる。

ボワギルベールもマンデヴィルも、人間の利益追求は結果的に秩序や繁栄の原因となりうるが、利益の追求それ自体は、「魂の墮落」や「悪徳」とみなしていた。本書の第3章で登場する、アベ・ド・サン＝ピエールは、それとは対照的に、18世紀のフランス功利主義の展開への道筋を整えた一人である。彼は、人間の欲求の感受能力は常に一定であるとしたうえで、欲求の対象物の種類が増えても欲求満足の総量は同じままであるという特異な欲求理論を展開し、のちのグラスランの欲求理論を思わせる議論を展開したり、効用の面から交換の不等価性へ着目したり、効用価値説の萌芽として興味深い議論を展開していることも指摘されている。

本書の魅力は何よりも、経済学の起源の系譜に新しい光を当てた点にあるが、そこに登場する言説が、200年以上前とは思えないような、きわめて現代的な議論を展開していることが随所に指摘されている点もたいへん興

味深かった。

また本書の議論では、マンデヴィルが主要な役割を演じていることにより、フランス経済思想の独自性が明らかになるだけでなく、当時のヨーロッパにおける国際的な思想交流が浮彫になった。これによって、逆説的ではあるが、スミスの思想の独創性や特殊性をあらためて認識することができたというのが、

評者の率直な感想である。

本書のように経済学の原点に立ち戻り、利己心と秩序の問題についての豊かな思想の軌跡を示すことは、現代において、経済学史のみならず経済学の他の分野にとっても非常に有益であると思われる。

(御崎加代子：滋賀大学)